

地域の医療連携の中核を担う りんくう総合医療センター

問合先 地域医療連携室 (☎469-3111 Fax469-7929)

泉州二次医療圏、特に泉州南部における小児医療の現状

周産期センター・新生児医療センター長兼小児科部長 住田 裕

少産少子化の波は衰える気配もなく年々出生数は低下し、2017年に生まれた子どもの数は前年よりも3万人余り少ない94万6,060人となり、過去最少でした。2年連続の100万人割れ、3万人超も減るのは12年ぶりです。これまでで最も出生数が多かった1949年には実に269万人もの子どもが生まれていたのです。

さて、そのような状況にあつて、泉州二次医療圏の小児医療・保健がどのような事態に陥っているか、市民のみなさんにも知っておいていただきたい事柄について以下に列挙していきます。

①周産期医療：大阪府南部の周産期医療の中核である泉州広域母子医療センターが、その機能を維持しています。ただNICUが満床のため、他地域へ母体搬送されるケースも若干あるので、当該センターのさらなる拡充が必要で、そのための産科医、新生児科医、眼科医、助産師、看護師などの数的確保が不可欠です。

②小児医療：かかりつけ医の必要性が叫ばれる中、泉佐野泉南医師会の小児医療に携わる医師の高齢化、減少に歯止めがかからないのがこの数年の流れです。当院でさえ小児科医を確保・維持するのはかなり難しくなっています。この状況下では、子どもの病気の重症化を予防することが重要になっています。抗生物質は適切に使用し、耐性菌の増加を極力防止すること、予防接種のさらなる徹底、などにより子どもの入院を減少させる必要があります。

③夜間休日小児救急：一次救急の主体は、泉州北部小児初期救急広域センターと泉州南部初期急病センターの2カ所です。二次救急は、泉州二次医療圏の7病院による輪番体制で維持しています。南部の一次救急に参画できる医師の確保が困難な状況が深刻になってきています。不要・不急の救急受診はできる限り避けていただきたいと願っています。

④小児保健：予防接種は、子どもたちの感染症からその重症化を予防する点において、極めて重要な役割を果たしています。ただ、それを実施する医療機関が減少していることがやはり問題となっています。同じように、子どもたちの健全な発育・成長を見守るはずの乳幼児健診、その健診医の確保も非常に困難な状況なのです。

以上、大雑把に泉州南部の小児医療・保健の現状を述べてきましたが、お読みになっていかがですか？少産少子化は、その子どもたちを診る小児科医の減少をも引き起こしているというこの現実。すぐに改善することは難しいですが、府、市、町、行政の枠を超えて集約できるような小児医療・保健の体制作りが喫緊の課題です。

